



門へ 13
1389
卷 1

憂喜世の滑稽の落盈をも拾ひ集り先哲の饌散したる。
骨を舐舐鬚鬚の底の糟噫き燭冷の酒を飲る自快生
酔の氣質とも出讀題無智哉論と題せる歎子書を先の歳
書肆。榮林堂の主人様よ上せ。幾取とせし其巻の目録の下
半白の有を厭。將著後編の目次を奉。因る其草稿を需と
頻る。予素より。戈微や。且世更学は疎るれば。迎由ヤヤと評
判を得と難。唯虎を画うんと。却る猫は類するの朝。こ
爰は著作而已。

東里山人誌

春新版繪草紙

岩戸屋喜三郎上梓

○目録

盲人の論

剣術の論

仁術の論

侠客の論

商人の論

娼妓の論

絶交の論

未至の論

和尚の論

智得の論

我慢の論

彈妓の論

塾士の論

媒約の論

呑氣の論

卑奴の論

奴僕の論



識
婆の論

悋
嗇の論

淡
酒の論

怒
酒の論

笑
酒の論

齟
齬の論

懸
取の論

婢
女の論

教
訓の論

通計二十五論

三編巻
目次

茶屋の論

夜鷹場の論

裏店穿の論

長局風評の論

奇妙奇代の論

法外の奴論

外種
通計廿五論



けんちのりょうん

けんちのりょうんは、かやあさきちうのりょうん
ふつちのりょうん日本上千まら
けんちのりょうんは、かやあさきちうのりょうん
ふつちのりょうん日本上千まら
けんちのりょうんは、かやあさきちうのりょうん
ふつちのりょうん日本上千まら
けんちのりょうんは、かやあさきちうのりょうん
ふつちのりょうん日本上千まら



けんちのりょうんは、かやあさきちうのりょうん
ふつちのりょうん日本上千まら
けんちのりょうんは、かやあさきちうのりょうん
ふつちのりょうん日本上千まら
けんちのりょうんは、かやあさきちうのりょうん
ふつちのりょうん日本上千まら

けんちのりょうんは、かやあさきちうのりょうん
ふつちのりょうん日本上千まら
けんちのりょうんは、かやあさきちうのりょうん
ふつちのりょうん日本上千まら
けんちのりょうんは、かやあさきちうのりょうん
ふつちのりょうん日本上千まら



けんちのりょうんは、かやあさきちうのりょうん
ふつちのりょうん日本上千まら
けんちのりょうんは、かやあさきちうのりょうん
ふつちのりょうん日本上千まら
けんちのりょうんは、かやあさきちうのりょうん
ふつちのりょうん日本上千まら

